

經濟論叢

第七十六卷 第六號

第二ラダイツ蜂起について……………穂積文雄…(1)

レーニンのブルジョア革命理論(2)……………堀江英一…(22)

ソロルド・ロジャーズについての一研究……………岸田理…(43)

[昭和三十年十二月]

京都大學經濟學會

ソールド・ロジャーズについての一研究

岸 田 理

一 イギリス歴史學派とロジャーズ

いわゆる歴史學派は十九世紀の中頃にドイツにおいて起つた。しかしこの學派の學說史上の意義は、ドイツについてだけ認められるというものではない。この學派が一八七〇年の普佛戰爭を契機として他國におよぼした影響もまた、無視することはできない。なかんずく、イギリス歴史學派はドイツにおけるように一學派をなさず、しかも、彼らの著述は散在的ではあつたが、フランスやイタリアにおけるよりも、この新思想の普及をもっとも力強く、かつ有效になした點において、ドイツにつぐものがあつたといえよう。

それでは、このようにみられるイギリス歴史學派の成立根據は、果していかなるところにあつたであらうか。スミスからリカードウにうけつがれた古典學派の經濟理論は、イギリス資本主義の發展が當然要請したとはいへないが、思想的には、一八四六年の自由貿易政策の確立（ピール條例―穀物法廢止）に大きな役割を果したことは疑いえない。その後、イギリス資本主義は世界の工場になるまでの發展を遂げたのである。ところが一八七〇年の普佛戰爭においてドイツが勝利を収めて以來、ドイツ帝國主義の形成が見られ、またアメリカ資本主義が高度の發展を

遂げ、次第にイギリスの壘を摩すようになると、一八七三年には恐慌が起り、それにつづいて不景氣がおしよせてきて、イギリスのそれまでの獨占的地位は必然的にゆるがざるをえなくなり、そこでこれらに對抗するため、イギリスは以前の自由貿易主義政策を放棄し、獨占化、すなわち、帝國主義の形成へと進んでいったのである。したがって、それまでの思想的表現である古典學派の理論にもいろいろと反省や批判が加えられ、ここに主として方法的批判の形ではあるが、イギリス歴史學派が擡頭することとなるのである。ゆえにイギリス歴史學派はドイッ歴史學派とその成立根據をやや異にするものといわなければならぬ。

かかる社會的背景を考察する場合、イギリス歴史學派は散在的に現われ、したがって彼らの見解の間に種々の相異が見られるとはいへ、それは自由競争にもとづくイギリスの産業資本主義の段階から、獨占資本主義形成にいたるまでの過渡的な混亂期における複雑な經濟現象に對應して現れた諸種の經濟思想の一派として、また社會主義思想に對立して現れた反動的思想として、把えられるべきではなからうか。かかる觀點からみると、この思想の意義は消極的であつたといわれねばならないと思われるのであるが、經濟學の研究方法論上において古典學派に對してもつこの思想の進歩性ならびに短所、そして後期に主として現れてくる反動性は、どういふ點にあるのであるか。私はこの點の究明に努力をつづけようと思う。

それでは、イギリス歴史學派に屬する經濟學者とはいかなる人びとであろうか。われわれは一應、リチャード・シローンズ(1790~1835)・ウキルター・マッシュョット(1826~1877)・タリン・レスリー(1827~1882)・ジョン・イングナム(1824~1907)・アーノルド・トインビー(1852~1883)・サイリアム・カニングム(1849~1919)およびサイリアム・アッシュムレー(1860~1927)などを指摘しよう。しかしながら、この他に古典學派から歴史學派への過渡的經濟

學者として、またイギリス經濟史研究の「草分け」としてのフロルド・ロジャーズ James Edwin Thorold Rogers (1829-1890) の存在もまた、無視することはできない。イギリス歴史學派への哲學的基礎づけは、クリフ・レスリーによつてはじめてなされたといわれている。その點、ロジャーズは理論になんの貢獻もなさなかつたが、古典學派經濟學者として出發した彼が、歴史研究を進める過程において徐々に古典學派から俗流經濟學派への移行を示し、さらに後には、矛盾を含みながらも、ある程度歴史學派の見解を抱くようになり、いろいろな形でイギリス歴史學派に問題を殘したということなど、われわれの興味を大いに惹くものがある。かかる意味において、私は上述の問題意識の解明に先立って、ここにロジャーズを取りあげてみた。ところで、ロジャーズについての研究は、經濟史を除いて、わが國においてはもちろん外國においても、十分になされていないのが現状であるから、以下不十分なから、主として彼の經濟思想およびその變遷、さらには彼の歴史研究による結論の出し方の問題性などについて、私の調べた結果を書き記してみよう。

註(1) John K. Ingram, A History of Political Economy (1915), p. 222.

二 ロジャーズの生涯、著作

まず、ロジャーズの生涯および著作についてあらまし述べておこう。

彼はジョージ・ヴァイニング・ロジャーズ George Vining Rogers (生死不詳) の第十一子として、一八二三年、ハムプシヤ州のヴェニスト・メオン West Meon で生れた。はじめはロンドンのキングズ・カレッジで教育をうけ、一八四三年、オックスフォード大學のマグダレン・ホールに入學、一八四九年、學位 M.A. (論文名不詳) をとる。彼は熱心な「高教會徒」(High Church)

rahman)だったので、學位取得ののち、オックスフォードのポール寺院の副牧師となり、全精力を教區の仕事にさそげた。しかるに、一八六〇年以後、いわゆる「オックスフォード運動」に對する同情をうしない、僧職をすてることを決意し、一八七〇年これから離れた。彼は元來、古典および哲學の研究家だったので、僧職にある間も、『アリストテレス論理學の紹介』Introductory Lecture to the Logic of Aristotle (1859) ならびに『ニコマッス倫理學』An Edition of the Nicomachean Ethics (1865) を出版している。

經濟學に關しては、彼はリチャード・コブデン Richard Cobden (1804~1865) の影響をうけ、早くから暇さえあれば、その大部分を政治經濟學の研究にささげ、一八五九年、キングズ・カレッジの統計および經濟科學の教授に選ばれた。一八六〇年に有名な『イギリスにおける農業と價格の歴史』A History of Agriculture and Prices in England の研究をはじめ、一八六六年にその第一、第二巻を出版した。彼の名聲は大部分この著書によるといわれている。一八六二年、オックスフォード大學の政治經濟學の教授に選ばれ、その職責を熱心に果したが、任期満了の一八六七年、彼の進歩的政治觀および急進的な政治演説家としての活動が、大學評議會の保守的メンバーの感情を害し、對立候補者であるボナミー・プライス Bonamy Price (1807~1888) にその職を譲らざるをえなかった。しかしながら、彼はこのように大學側から拒否されたにもかかわらず、なお政治經濟學の研究をつづけ、一八六八年には、『政治經濟學入門』A Manual of Political Economy を、一八六九年には、『スミス國富論』An Edition of Adam Smith's Wealth of Nations を出版してゐる。

彼はこのやうに經濟學の研究をつづけたとはいへ、やはりそれ以後は、彼の全精力の大部分は當時の政治にさそげられるようになった。なぜなら、コブデンとロジャーズとの間柄は、ロジャーズをして單に經濟學のみでなく、政治に對する關心をも大い

に高めていたからである。彼らは年令が相當へだたっていたにもかかわらず、親密な交友關係をつづけ、ロジャーズは熱心にコブデンの政治觀、經濟觀を採用した。その後、幾多の經驗が彼にコブデンの見解のいくつかを再考させたが、依然彼は生涯を通じてコブデンの指導原理を固守し、一八七三年、彼の出版せる『コブデンと現代の政治見解』(Cobden and Modern Political Opinion)において、コブデンの政治的見解を全面的に擁護した。ロジャーズはまた、これとあわせてコブデンの親友であるバスターアの影響(後述)をも深くうけていたので、マンチェスター學派獨得の教義に關する限りでは、彼をこの派に編入して差支えなからう。さらに彼はコブデンを通じてジョン・ブライト(John Bright (1811—1888))と相知るようになり、彼らはコブデンの死後、コブデン・クラブを結成し、その積極的メンバーとなった。また、ロジャーズはブライトと協力して、一八七〇年、『ロンドン演説集』(Speeches by Richard Cobden M. P. を、さらに一八六八年および一八七九年には、『ブライト演説集』(Speeches by the Rt. Hon. John Bright M. P. を編集した。このような影響のもとに、ロジャーズは政治運動に身を投じ、一八六〇年より一八八〇年までの間、彼みずから政治演説家として活躍し、その有能さが證明された。たとえ、彼はアメリカ南北戦争の間、ブライトなどとともに北軍を擁護し、また印度のジャマイカにおける總督エイレの行爲を痛烈に非難した。さらに初等教育に關する論争においては、『國民教育連盟』(The National Education League)の進歩的な人びとと行動をとるに、また「協同組合運動」には常に好意を寄せ、一八七五年、ロンドンにおける第七回協同組合運動の大會において、その司會者をつとめた。

このような政治活動が、ロジャーズに議員としての適格をえさせ、彼は一八八〇年から一八八六年までの間、自由黨議員に選ばれた。しかし、議員になるまでの華かな政治活動に比し、議員期間中は、あまり下院の討議に参加しなかったが、一八八六年三月十日、地方税は土地所有者と借地人との間に分割されるべきであるということを忠告する決議案を提出し、これを通過せしめた。しかしながら、彼はグラッドストンのアイルランド地方自治政策に共鳴したため、同年七月の總選舉において落選し、彼の政治生活はここにおわりをつげた。

これ以來、彼はふたたび研究生活に返るのであるが、議員生活においても、ペイスウォーターにある予備校で歴史の講義をしたり、一八八三年以後は、ウスター・カレッジの政治經濟學の講師をしていたが、一八八八年、彼の以前の敵對者であるボナミイ・ブライスの死とともに、ふたたびオックスフォード大學の政治經濟學の教授に返り咲いた。この年に、彼のそれまでの全著作を仕上げるものとみなされる最後の著作『歴史の經濟的解釋』The Economic Interpretation of History が出版され、その後まもなく、一八九〇年十月十二日に死亡した。

以上簡単にロジャーズの生涯および著作にふれたが、なお参考のために、本稿のおわりにロジャーズの著作目錄を附しておこう。

註(1) ロジャーズの兄、ジョン・フライ・ロジャーズが、一八二七年コブデンの妹エマと結婚していた關係上、ロジャーズの存在は、たえずコブデンの注意を惹いていた。

(2) この著作はその後、第三巻から第八巻まで出版された非常に大きなもので、後世の史家から種々批判されているが、彼の全著作中、生涯をかけた忍耐強い探究の記念碑であるといわれている。

三 ロジャーズの經濟思想

さて、彼の經濟思想を述べる段階に立ちいたったが、彼の功績は主として經濟史研究にあったので、一貫した理論體系を残したわけではなく、ただ彼の經濟史研究の中にそれが散見されるだけである。したがって、以下の敘述もはなはだ断片的ならざるをえないということを、予め断わっておかねばならない。

彼の經濟思想は主として『イギリスにおける農業と價格の歴史』第一、第二卷(一八六六年)、『經濟學入門』(一八

六八年)、および『歴史の經濟的解釋』(一八八八年)の三つの著作の中に特徴的に見出され、これらの中、前の二者は比較的、彼の前期の思想を表明し、後者は後期のそれを表明するものとみなされる。私は便宜上、これらの二つの時期に分けて敘述しよう。

A 前期の見解

一八六六年『イギリスにおける農業と價格の歴史』の最初の二巻が出版されて以來、ロジャーズはイギリスの經濟學者の間でユニークな地位を占めるようになった。というのは、當時の問題に關する彼自身の見解をはじめて過去の歴史知識に基礎づけたということ、および彼の集めた事實から引きだされた結論そのものは批判をうけやすいが、彼の集めた事實は多量の價值ある資料を提供したということ、さらに、彼こそイギリス初期經濟史についての第一人者であるということが、一般に認められるようになったからである。

しかしながら、ロジャーズがこの歴史部門―特に經濟史―の研究に向つたのは、なんら經濟學研究の方法論上の問題によつてではなくて、次に明らかのように、全く偶然的な動機からであつた。

「私は、一八六〇年の(國際統計會議) The International Statistical Congress (七月十一日より六日間、ロンドンにおいて開かれた―筆者註―)の會合において、昔からの價格 ancient prices の研究の重要性、および勞働價格と食糧價格の間に決せられる比率に關してなされたいくつかの暗示のために、はじめてこの歴史部門を取りあげてみる氣になつた。その後、オックスフォードへ歸つた時、私は長い休暇を家で過ぎざるをえなかつたので、ボドレイアン圖書館でさがし求め、十四世紀は少しばかり、十六世紀は多くの證據 evidence を發見した。最初、私の探究を十六世紀に生じた價格の變遷に限定するのが私の意圖であつた。それで、それらの知識はオックスフォードの諸種のカレッジの會計帳簿からえられるかも知れないと考えたので、まずはじめに、

オール・ソウルズ・カレッジの會計帳簿を調査した。つづいて私はマートンにある記録室を調べる許可を得、そこで極めて價値ある多くの文書を發見した。それがため、私はできるだけ早くこの研究に着手し、ロンドンの公記録保存所の記録を利用しようと決心した。私は、このようにして偶然に、古物研究者、antiquarian になつたのである。」と。(筆者傍註)

ともかく、經濟學者としてのロジャーズは、その當時全く完全な解體期の古典學派經濟學者であつた。穀物法廢止の年(一八四六年)に學位 B.A. をとり、ユブデンとの交友を樂しみ、さらに J・S・ミルの影響が最高に達していた時期、すなわち一八六〇年に、『イギリスにおける農業と價格の歴史』の研究をはじめた彼に對しては、われわれはそう名づけざるをえないのである。したがつて、彼は當時の一般的歴史觀、すなわち、歴史をば經濟理論の謙虛な女中とみなしたり、また歴史の助けをかりることなしに到達された法則の單なる例證を供給したり、また、その法則をも確かめたりするものだとの歴史觀を有していた。だから、彼は彼の調べた事實が古典學派のいわゆる「金言」maxims を確かめないかも知れないというような疑惑を全然もたず、むしろ、中世紀こそ古典學派のたてた經濟法則の作用がもつとも明瞭に跡づけられる時代であると考えていた。

ロジャーズのこの時期におけるこの心境は、實銀の歴史の取扱ひ方によつて、十分例證される。まず最初に彼は、報酬は雇用のために競争する人數と、このような競争者間に分割されうる實銀總額との關係によつて決定されるという、いわゆる實銀基金説を當然のこととして述べ、さらに、「われわれは演繹的理性によつて、明瞭にいくつかの確實な結論、なかでもとくに、勞働價格と食糧價格は幾分、そして大規模に相對的であるという、すなわち、食糧價格の高いところは勞働價格もまた高いという結論を、予期しておかねばならない。」(彼はここでリカードの理論を全面的にうけいれている)と述べ、彼の集めた歴史事實でもつてこれらの假説 hypotheses を例證し、

これらの假説がいかに確證されるかを、示そうとした。さらに、「歴史は急進的經濟學者（リカードゥ派經濟學者を指す―筆者註―）の教義を例證したように、またそれは同様に、彼らのレッセ・フェールの福音 Gospel をも確めた」という言も注目に値しよう。

それから二年後一八六八年に、『政治經濟學入門』が現れた。この著書においてはじめて、自己を他の古典學派經濟學者と分離させようとする傾向が示されている。しかし、この見解の相違がいずれにあるかは後述することとして、まず、この著作について注意されねばならない重要なことは、ムジャーズがすべての古典學派を否認したにもかかわらず、やはり著しいまでに古典學派的であつた、ということである。「これらの實行（貸銀を高めようとする労働者の結合）は經濟法則の干渉である」とのべていることは、このことの證據としてあげられるだらう。さらにまた、はげしい個人主義があらゆる章に明白に見出される。たとえば、貸銀に關していえば、彼は依然貸銀基金説を放棄せず、むしろ、貸銀基金説が一層の妥當性をもつて現れる貸銀に對して労働組合はなんの影響をもおぼしえないということを證明しようとする議論を、われわれはそこに發見する。すなわち曰く、

「労働組合とは、労働者階級の一〇パーセントが残りの九〇パーセントの労働者から奪わんがために結合する組織であるといふことが、譬句風にいわれてきた。労働者側におけるいかなる行爲も、その國の資本額を増大しえない。それがため、労働組合がこの基金のより大きな分け前を強奪することに成功すれば、それは組合に入ることのできない、または入ることを欲しない労働者により少ない賃銀を渡すことによつてのみ可能なのである」と。

そして彼は、労働者が自分たちの運命を改善する唯一の道は、めいめいが自己の労働をより良き市場へ移しうるために、できるだけ多くの金を貯蓄すべきであると、信じていた。さらに保護貿易に關する章では、社會はできる限

りの大きな自由が個人の意志に與えられんがために存在していると斷言し、課税に關する章では、彼は税金をば單純に、勞働分業の結果、政府が個人のために二層都合よく果しうるサーヴィスに對して支拂われる個人の側での負擔である、みなしていた。

しかしながら、これと併行して、ロジャーズがバステイアの教義に深く印象づけられていることも注目すべきである。すなわち、彼は自己の經濟樂觀主義をバステイアよりも遙かに強調している間に、當時支配的であつた古典學派の教義と自己との不一致をかなり明らかにしている。コブデンのある弟子が、バステイアをフランスにおける偉大な經濟學者であるといつたり、またバステイアの『經濟的調和』(Harmonies économiques)を美辭麗句の讚辭でもつて紹介したが、ロジャーズのバステイアに對する尊敬は、そのような言葉を遙かに越えていた。したがつて、バステイアの影響は、ロジャーズの全思想を色づけていたともいえよう。たとえば、ロジャーズはバステイアと同様に、自由貿易はある意味では兩當事者にとつて利益になるものであるから、それは決して干渉されてはならない、ということを證明するために用いた「サーヴィス」という曖昧な言葉は、バステイアより學びとつていたのである。

バステイアは、みづからマルサスの人口論を修正した理論を、非常に重要なものと考へていた。すなわち、彼はマルサスの法則「人口は生存手段を越えて増大する傾向がある」の代りに、「人口は生存手段の高さにまで増大する傾向がある」という法則を置きかへていた。バステイアはこの際、これを「人間の完成の偉大な眞理」によつて説明している。ロジャーズもバステイアと同様に、食糧は人間生活にとつて先立つ必要條件であるから、人口は食糧よりも早く増大することができないと述べる。しかしながら、ロジャーズはこの際、バステイアのもつていない知識、すなわち、イギリスにおいて生産された食糧の増大が、實際には、人口の増大を追い越していたということ

彼に信じさせるイギリス農業史の知識を、もっていた。だから、この確信は疑いもなく、ロジャーズがバステイアより引き出した印象の助けともなり、そこで彼は、「人口は小麦の量の増大とともに増加する¹¹⁾」という明言をつくったのである。

このように、ロジャーズがバステイアの影響をうけているということは、彼が徐々に古典學派から俗流學派への移行を示すものといえよう。次に彼の地代に關する見解にふれてみよう。彼はいわゆるリカードウの地代論には少しも反對しなかつた。實際、『入門』において彼は、リカードウと全く同じ方法で地代の定義をおこなっている¹²⁾。しかしながらロジャーズがもつとも反對したのは、沃度の異なつた土地が同時に耕作されるようになった原因についてなされたリカードウの説明に對してであつた。すなわち、リカードウが考へたこの原因とは、人口の増大であり、リカードウの地代論は社會の正常な發展に關する理論のほんの一部分であり、その社會發展の中に、より増大せる人口、より、高い地代、より、高い食糧、より、低い利潤などが、必然的な連關において、相互の結果として起ると説明されるのであるが、ロジャーズはまさに、この主張に對して反對する。彼にしたがえば、イギリスにおける劣等な土地の占有、および相當期間耕作された土地の肥沃さが増大する原因は、農業技術の發達にもとづくものであると説いている¹³⁾。

以上、初期に屬するロジャーズの見解について述べてきたが、『農業と價格の歴史』第一、第二巻と、『入門』とを比較した場合、以上の敘述で明らかなるように、後者において相當矛盾した見解を含みながらも、前者からの明瞭な相違がみられるのである。すなわち、前者においては歴史および統計の研究へ出發しながらも、依然古典學派の域を脱せず、歴史は古典學派の原理を實證するものと信じていたが、後者において歴史研究の進むにしたがい、

歴史は必ずしもその原理を實證せず、かえって異なつた歸結をうむものだということを、認識しはじめている。しかしこの當時まだ彼は、理論に對する歴史の優位を強調してはいなかつた。この主張が明瞭に現れてくるのは、やはり矛盾した形においてはあるが、後期の『歴史の經濟的解釋』においてであつた。

註(1) William J. Ashley, 'J. E. Thorold Rogers' in *Political Science Quarterly* (1889), p. 381.

(2) Rogers, *History of Agriculture and Prices in England*, vol. II, pref. p. xi. なお、この文中に引用されている英國統計會議〈ていじつ簡單に述べておこう〉。この會議は一八五三年、ムルギーのブラッセルで開かれてより九回を數えた。ロンドンでの會議は、その第四回目にあたる。はじめの頃は、この會議は中立的立場をとり、主として official statistics の組織促進を圖り、科學的、社會的問題は全面的に排除されていた。しかしながら、ロンドンにおける會議を契機として、これらの問題も取扱われるようになり、ユルバネツ Comperitz は「死亡の法則」に關し、ニューマーチ Newmarch は「價格と賃銀」に關する報告をまごころている。さらにこの際、會議が政治家、經濟學者、博愛家などに、労働者の安寧を促進するため、彼らの状態、財源ならびに要求などを調査、研究するように勸めるといふ決議案が通過している。思うに、ロジャーズは上記のニューマーチの報告および決議案から大きな刺激をうけたのではなかつたか？

- (3) Rogers, *ibid.*, vol. I, pref. p. ix.
- (4) Rogers, *ibid.*, p. 281.
- (5) Rogers, *Manual of Political Economy*, P. 56.
- (6) Rogers, *ibid.*, pp. 95, 96.
- (7) Rogers, *ibid.*, p. 223.
- (8) Rogers, *ibid.*, p. 273.
- (9) Rogers, *ibid.*, pp. 4~6. Cf. Bastiat, *Harmonies*, pp. 109 et seq.
- (10) Bastiat, *ibid.*, pp. 170, 171.
- (11) Rogers, *op. cit.*, p. 73.

(2) Rogers, *ibid.* p. 159.

(3) Rogers, *ibid.* p. 157. Cf. Rogers, *Colden and Modern Political Opinion*, pp. 54, 55. しかしこの點について、アッシュレーは次のように述べてゐる。「ロジャーズはこのむきだし主張を賞讃したとは思われぬ。實際、ロジャーズがリカードの一つの、そして十分な原因を、他の一つの、そして十分な原因に置きかえたことそれ自體、彼が非歴史的經濟學者（古典學派經濟學者を指す—筆者註—）からうけついで單純な結論を好むことにもとづいてゐる。しかしながら、彼は少なくともイギリスの十八世紀前半のような時代において、徐々に増大する人口および低價格にもかかわらず、農業の改善にもとづいて地代が高騰したということを信ぜずき理由のあることを示している。そこでもし、ロジャーズのリカードに對する批判が、リカードのきちんとして單純な抽象的理論の破壊に、また地代に影響をおよぼしたさまざまな原因への正當な顧慮によつてリカードの理論をとりかえていたならば、彼は經濟學を眞に生命あるものにもどす役割を果したであらう」と。(Ashley, *op. cit.*, pp. 383, 389.)

B 後期の見解

前述したように、一八八八年に出版された『歴史の經濟的解釋』は、彼のそれまでの全著作をまとめあげたものであり、したがつて彼の後期の思想をよく、表明するものとみなされているが、これをまず『經濟學入門』とくらべた場合に、人を印象づける最初のこと、前者が古典學派に對して示すはげしい反對の態度である。彼はいう、

「私は社會史の研究によつて、人氣のある經濟學者たち（古典學派經濟學者を指す—筆者註—）が、自然的なことであると信じていることの多くが、實は非常に人爲的なものであり、彼らが法則と稱しているものが、實はしばしば、性急に於て思慮をかき、かつ不正確な歸納であり、また彼らが實證によつて論破しえられないと考へているものが、多くは實證によつて虚偽であるといふことを、發見しはじめた」と。

彼はここで、經濟學の理論構造のいかなる部分も變化するといふことに注意しはじめている。すなわち、「ある體

系をくみたてようとする場合に、經濟學者たちは、それまでのあらゆる體系を破壊した²⁾と。

またロジャーズは、古典學派にとつての重要な理論、たとえば、マルサスの人口論およびリカードウの地代論に對して、それらは「言葉上のいい争ひ」logomachy という言葉で非難し、さらに

「政治經濟學の名譽を損じたものに二つある。一つは傳統的に事實を顧慮しないこと、もう一つは、政治經濟學が種々の定義でみずからを窒息させたことである。……言葉の微細な區別とか定義の擴張は、彼らにたいしてお氣にいらぬ仕事であり、それは少しも知識を必要とせず、ただ鋭くて十分なのである。」³⁾

と痛烈に古典學派の事實無視を非難している。このような事情のもとに、ロジャーズは、選擇された事實のみが適するような理論を構築することではなく、社會事實の歴史を調査、説明すること、すなわち、最初に事實をえてそしてそれらを説明することを、彼の仕事とすることに決心している。そこで彼はいう、「正しく位置づけられる政治經濟學とは、あらゆる社會狀態の解釋 interpretation である」と。⁴⁾この限りにおいて、彼の見解は歴史學派へ大いに近づいているといえよう。

經濟理論に關して、彼は賃銀論だけに見解の變化を示している。彼はかつて賃銀に關して急進的なコブデン主義の考え方に走っていたが、この時期においては、賃銀に對して大いに寛大さを示すようになってゐる。すなわち、彼が初期に信奉していた賃銀基金説をば半ば眞理をもつたもの、いな、誤謬とさえみなして、これを拒否している。⁵⁾彼は勞働組合を「*Joint Stock Principle* の合法的に發展したものととして正常化するようになり、勞働組合は時々賃銀を高めたり、しばしばその下落を防いだりするがゆえに、役立つものであると考えるようになってゐる。

以上のように、ロジャーズは初期に比してかなり古典學派から脱しているとはいへ、まだその殘存物が多く見ら

れる。たとえば、この書物の最初の部分 *The Economic Side of History* にそれが見出される。そこで彼はいう。「もし私が労働者と資本家との關係がなんであるかを、簡単に述べるならば、經濟史を取扱う場合にたえず現れてくる事實を例證するのに、このことは大いにわれわれの助けとならう」と述べ、たいていの古典學派の論文の最初に必ず現れるように、積極的または生産的富、すなわち資本と、消極的または不生産的富とを區別する。そして資本の機能をば労働の繼續的雇用の確保、および、できる限り價格と利潤を平均化ならしめるものと定義し、さらに利潤をば利子、保険料および監督賃銀に分解している。これらは古典學派の理論をそのままうけついでたものであつて、利潤に關しても、その當時おこつた議論に全然注意を拂うことなく、むしろ、「あらゆる經濟學者は利潤のかかる特有の分解に全く一致している」とさえ斷言している。

經濟政策に關して彼の古典學派ぶりは一層著しい。彼は反穀物法時代のはげしさでもって保護貿易主義に激怒する。「あらゆる保護貿易主義は、誰か他の人を奪うことを意味する」といつたり、また若い産業の場合に例外として保護貿易を認めた J・S・ミルに言及し、「いかなる仕事においても、自由な出入口のないことは、人間の天性に對する無知、および事實に對する無知をよく示すものである」と公言し、自由貿易主義を擁護している。さらにレッセ・フェールに關しては、それが現代社會の害惡に對しては萬能藥を果していないことは認めるけれども、それは過去の政府のあやまつた行動の結果であり、イギリス議會による、その原理の違背であると信じ、依然レッセ・フェールを支持しているのである。したがつて、彼は「政府の干渉好きなおせっかい」に反對する。たとえば、國家による鐵道の買収を欲しない。なぜなら、鐵道労働者は國家の所有權が多くの人びとに任されているという理由で、彼らの政治力を「より、短い労働時間」と「より、多い支拂い」をうるため使用するだろうからである。彼は八

時間勞働制に對して、同情しながらも、そのような改革は國家の働きによるよりも、むしろ勞働者の結合によつて起さるべきであるとの見解をとり、「私は成人勞働者のための立法に大いなる反感をもつ」¹¹⁾「私は政府の機能をば制限することをよいと確信している」と述べて、當時の高まりゆく勞働運動の波に一步退きながらも、やはり極端な自由主義、個人主義を表明している。

以上で明らかのように、彼は後期において古典學派理論の狹隘性の認識から、歴史による實證の重視の方向へ傾きながらも、やはり政策面においてはげしく自由貿易主義、レッセ・フェールを擁護したということは、彼がコブデンの徹底した國際平和主義による自由貿易主義原理の影響をうけ、しかもマンチェスターを中心とする輕工業者の代辯者であつたという理由にもとづくものであらう。しかしながら、この當時、アメリカ、ドイツでは輕工業から重工業への轉換、それを促進するところの獨占が進行し、その發展はイギリスを凌ぐものがあつた。そこでイギリスにおいても同様の轉換がおこなわれはじめ、重工業促進政策がみられようとした。ロジャーズもかかる社會的背景の變遷に抗しえなかつたものとみえて、遂に彼の死後出版された『イギリスにおける産業と商業の歴史』『The Industrial and Commercial History of England (1892)』においては、「もはや競争の恵みゆたかな作用はおわりをつげた。そこでもし生産者たちが生存をつづけていこうとするならば、國家の獎勵によつて十分な利潤がえられるような何か他の手段が採用されるべきである」と述べて、イギリスにおいても、近い將來にカルテルやトラストが組織されることに、期待を寄せざるをえなかつたのであつた。

註(1) Rogers, *Economic Interpretation of History*, pref. p. vi.

(2) Rogers, *ibid.* p. vii.

- (3) Rogers, *ibid.* p. viii.
- (4) Rogers, *ibid.* p. xii.
- (5) Rogers, *ibid.* pp. 308~317.
- (6) Rogers, *ibid.* pp. 17~21.
- (7) Rogers, *ibid.* p. 375.
- (8) Rogers, *ibid.* p. 386.
- (9) Rogers, *ibid.* p. 350.
- (10) Rogers, *ibid.* p. 512.
- (11) Rogers, *ibid.* p. 352.
- (12) Rogers, *ibid.* p. 522.
- (13) Rogers, *the Industrial and Commercial History of England*, p. 377.

四　　む　　す　　び

以上ではほロジャーズの經濟思想の概要を述べたことと思う。經濟學者としての彼の立場をはつきり規定することはむずかしい。彼の主張は非常に矛盾してはいるが、力強く vigorous、彼の結論は非常に一方的ではあるが、苦心の形跡がみられる laborious ので、彼に對する批評が眞二つに引き離されていたといわれるのも當然であろう¹⁾。しかしながら、彼の全思想を貫くものは、あくまでもコンデンの流れをくむ急進的自由主義であり、後期においてプロレタリアートに對して同情をもつにいたったにせよ、やはり彼はマンチェスターを中心とする商工ブルジョアジーの代辯者であつたといえよう。

それにもかかわらず、イギリスの革命的社會主義者たちによって彼の名が呼びもとめられたのは、彼の歴史研究による結論、および、彼がそれらを表現する場合に用いた言葉のはげしさによるものと思われる。²⁾そこで彼の歴史研究による結論について若干ふれよう。たとえば、ロジャーズは一三八一年の農民一揆についていう、それは一三四九年の黒死病による人口減少の結果、賃銀が増大し、これを機縁として領主の反動がおこなわれたのに對して、農民が自衛的に抵抗して起つたものである、と。その結果、一揆が眞の成功におわり、農奴制は廢棄されるにいたつたと、彼は結論するのである。³⁾またこの一揆以後、約一世紀半にわたつて小作人および日雇労働者の繁榮の狀態がつづいたが、ヘンリー八世、エドワード六世の惡貨の發行により、食糧價格の騰貴は賃銀の騰貴をはるかに上回り、それ以來、農民、日雇労働者の貧困、墮落がみられた。そこでエリザベスによる通貨の改革がおこなわれたが、それは貧困を改善するのになんの役にもたたなかつたと述べ、農民の貧困の原因を王および宮廷人の強奪にもとめた。⁴⁾さらに彼は十八世紀前後から起つた農民の貧困、害惡に對しても、イギリス製造工業の性格の巨大な變化にもとめず、やはり、あの古い救貧法、王の強奪および土地所有者の貪欲だけにその原因をもとめた。⁵⁾このようにロジャーズは、あらゆる社會矛盾の原因を上部構造（主として國王、地主および法律）から農民、日雇労働者に對する壓制にもとめ、かかる上部構造に對する激しい憎惡が、彼の歴史研究による結論の基調をなしていたと考えられる。かかる把握が十分なものでないにせよ、農民、日雇労働者の立場から『イギリスにおける農業と價格の歴史』をとりあげ、彼らの反抗および革命性を認めていた點において、イギリス社會主義者のうけいれるところとなつたのであろう。

次に私は彼の經濟思想に現れた矛盾について考察しよう。彼は古典學派の影響のもとにありながらも、比較的初

期の時代に歴史研究をはじめた。その際、一般の歴史學派經濟學者のごとく、經濟學研究の方法論から出發せず、彼にいわしむれば、全く「偶然的」な動機からであつて、しかも、歴史でもつて古典學派の理論を例證し、歴史に對する理論の優位を證明しようとした。しかしながら、歴史研究の進むにしたがい、多くの資料が発見され、また十九世紀後半にイギリスの資本主義が成熟するにつれて、種々の社會矛盾の現れてくるという過程において、古典學派の理論、ことにリカードの抽象的演繹法による經濟理論の普遍妥當性をば、否定しはじめた。もちろん、彼がリカードの方法の一面性ならびに歴史無視、それにしたがう選擇された事實にのみ適用される理論の構築に疑いをもち、具體的歴史的方法でもつてこれらを論破せんとした意圖は、高く評價されるべきではあるが、彼が經濟現象の本質にふれず、ただ社會事實を歴史的に調査し、それらでもつて社會のあらゆる状態の説明をおこなつた點において、さらにはリカードに對する拒否から抽象的演繹法の妥當性の拒否にまでいたつた點において、彼は他の歴史學派經濟學者と同様に大いに批判されるべきであらう。すなわち歴史認識としての經濟學が彼には少しも問題にならず、むしろ資本主義體制を前提としての處方箋的役割からのみ、經濟學を問題にしていたといえよう。この意味において、彼はリカード以後に現れたイギリス經濟學者のように、事物の本質究明をさけて、現象の表面的解釋のみをおこなつたとする經驗主義的經濟學の流れの中にあつたともいえよう。彼は後期においてこのようにはつきりと方法的に歴史學派の見解を表明しながらも、なお經濟政策の面において、古典學派的色彩を残していたといふことは、前述したように、彼の立場から生ずる當然の結果であつて、それをすら死の直前には放棄するにいたつてゐる。そこでもし、『イギリスにおける産業と商業の歴史』（ロジャースの死後、一八九二年彼の第四子であるアーサー・ロジャースが遺稿をあつめ編纂）において理論的にも政策的にもほぼ完全に歴史學派的立場に

立つようになった彼と、他のイギリス歴史學派經濟學者との差異を強いて述べようとするならば、兩者による歴史研究を通じての結論の出し方が、古代論等に現れた二派のように、前者は激變說 *catastrophic theory* をとるのに對して、後者は進化論說にしたがっていたという點であろう。

ともかく、彼の經濟思想が以上のような變遷をたどつて、しかも矛盾した形で現れたのは、十九世紀後半もつとも混亂したイギリスの社會狀態、それに應ずる古典學派の崩壞と歴史學派の勃興をもつともよく反映したからではなからうか。最後に、私は彼の歴史研究による結論が種々の批判をうけながらも、イギリスにおける最初の經濟史研究に生涯をささげ、その後につづく經濟史研究を促進させ、開拓者の役割を果した功績を大いに讃えて、この稿をこししよう。

註(1) Ashley, *op. cit.*, p. 406.

(2) Ashley, *ibid.*, p. 396.

(3) Rogers, *History of Agriculture and Prices in England*, vol. I, pp. 81~83; *do.*, *Six Centuries of Work and Wages* (1884), p. 253. なお、ロジャーズの農民一揆の原因および結果に関する見解の妥當性については、大塚久雄『近代歐洲經濟史序説』(改訂版上ノ二)一九五頁、一九六頁の註(9)を参照されたい。

(4) Rogers, *Economic Interpretation of History*, pp. 34, 240, 241; *do.*, *History of Agriculture and Prices in England*, vol. IV, *pref.*, pp. vi, xiv, xv. なお、この見解を關する批語を「アシュレー」Ashley, *op. cit.*, pp. 401~403 及び 409。

(5) Rogers, *Economic Interpretation of History*, pp. 243, 246.

著作目錄

A.

1. Primogeniture and Entail. Manchester. 1866.
2. A History of Agriculture and Prices in England. Oxford.
vols. I and II. (1259~1400) 1866.
vols. III and IV. (1401~1582) 1882.
vols. V and VI. (1583~1702) 1887.
vols. VII and VIII. (1703~1793) 1893.
3. A Manual of Political Economy. Oxford. 1868.
4. The Speeches by the Rt. Hon. John Bright M. P. (edited). London. 1868.
5. An Edition of Adam Smith's Wealth of Nations. 1869.
6. The Speeches by Richard Cobden M. P. (edited). London. 1870.
7. Historical Gleaning. London.
 - a) a series of sketches, Montague, Walpole, Adam Smith, Cobett. 1869.
 - b) 2nd series of sketches, Wicliff, Land, Wilkes, Home Tooke. 1870.
8. An Elementary Treatise on Social Economy. 1871.
9. Cobden and Modern Political Opinion. 1873.
10. A Complete Collection of the Prospects of the Lords, with Historical Introductions. Oxford. 1875.
11. The Correspondence of the English Establishment, with the Purpose of its Foundation. London. 1875.
12. Ensilage in America; its Prospects in English Agriculture. London. 1883.
13. Six Centuries of Work and Wages. London. 1884.

14. The History of Work and Wages. London. 1885.
15. The British Citizen; his Right and Privileges, in the People's Library. 1885.
16. The First Nine Years of the Bank of England. Oxford. 1887.
17. Economic Interpretation of History. London. 1888.
18. The Relations of Economic Science to Social and Political Action. London. 1888.
19. Holland (Story of the Nations Series). 1888.
20. Oxford City Documents (1268~1665). Oxford. 1891.
21. The Industrial and Commercial History of England. London. 1892.
22. 'Finance' in Encyclopædia Britannica (9th edit.).

B.

1. An Introductory Lecture to the Logic of Aristotle. 1859.
2. An Edition of the Nicomachean Ethics. 1865.
3. A Dictionary to Aristotle.
(未出版、Manuscript は現在 Oxford の Worcester College に保存)
4. A Translation of Euripides' Bacchæ into English Verse. 1872.
5. Paul of Tarsus; an Inquiry into the Times and the Gospel of the Apostle of the Gentiles, by a graduate (anon.). 1872.
6. Verse Epistles, Satires and Epigrams; imitated from Horace and Juvenal. 1876.
7. Loci e Libro Veritatum; Passages selected from Gascoyne's Theological Dictionary. 1881.
8. Rabbi Jeshua (anon.). 1881.
9. Bible Folk Lore. 1884.

(註) 著作文獻を便宜上、A・Bに分類したが、Aは主として政治經濟學に關するもの、Bはそれ以外のものとする。